

西部地区の歴史文化遺産一覧(1)

※視点番号は252頁を参照。

No.	名称	もの	場	と	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化						解説	
						1	2	3	4	5	6		
1	鳥打峠の地蔵	●			7 27		●			●			鳥打峠を福浦側へ下った街道筋にあったものが現在地に移されたもの。高さ約120cm、幅約60cmを測る半肉彫り立像で、明治3(1870)年の銘がある。
2	峠の地蔵	●			7 27		●			●			福浦から岡山県日生町寒河へ出る峠の国道沿いにある。地蔵堂の中に祀られ、像高42cmを測る丸彫りの坐像。台座には明治17(1884)年の銘がある。
3	迎えの地蔵	●			7		●			●			くちの池(別名・西のハス池)堤防南端の火葬上跡に東を向いて祀られ、高さ約127cmを測る板碑である。正面に「南無阿弥陀佛」と刻まれている。火葬場の迎え地蔵であった。
4	古土地蔵	●			7 8 27		●						像高30cmの半肉彫り立像。下半部が欠損している。
5	大泊地蔵	●			7 27		●			●			天則荒神社へ至る山道の手前にあり、高さ約43cmの丸彫り立像である。現在はコンクリート製の堂に祀られ、歯痛に靈験があるとされる。
6	赤ノ峠の地蔵	●			7 27		●			●			像高87cmを測り、台石には「弘化二乙(1845)年己正月」の銘がある。かつては旅人の安全を願って備前国へ抜ける寺山街道に通ずる赤ノ峠の八合目に建立されていたが、峠を通る人も少なくなり、昭和54(1979)年2月18日堂宇新築の際、現在地に移し安置された。
7	折方橋の地蔵	●			7 27		●	●		●			折方橋の正面に建立されていたが、道路拡張計画のため、昭和49(1974)年8月に堂宇を新築して現在地に移された。2体あり、一つは像高60cmの丸彫り坐像で、男子出産を祈願すると必ず男の子が生まれるといわれ、神戸・姫路方面からも参詣する人があった。台座は別の石仏のものを転用している。もう一体は半肉彫りの立像である。
8	長安家の地蔵	●			7		●			●			長安家のある当主が迎え地蔵を寄進建立したが、火葬場統合により移転、堂宇を新築して安置された。像高73cm、寛政11(1799)年造立の丸彫り坐像。
9	延命地蔵	●			7		●			●			像高81cmを測り、両手で宝珠を持った丸彫りの地蔵。台石の正面には「延命地蔵菩薩」、右側面に「昭和二十八(1953)年建之」の銘がある。
10	真木地蔵	●			7 27		●			●			像高84cmを測る半跏像。台石正面には「南無阿弥陀仏」と刻まれている。右手に錫杖、左手に宝珠を持つ。鳥打峠の頂上より東10mほど北側に建立されていたが、昭和45(1970)年頃に堂宇の新築の時、現在地に移された。
11	機ヶ谷池の地蔵	●			7 8		●	●		●			機ヶ谷池の工事犠牲者の冥福、池の安全加護を祈願して池の堤西側に祀られたもの。昭和23(1948)年造立、像高80cmの丸彫り立像。
12	一本松の地蔵	●			7		●						明治11(1878)年に造立された、像高94cmを測る丸彫り立像。
13	見真大師石仏(親鸞上人)	●			8		●			●			大きな自然石の上に祀られた像高52cmを測る半肉彫り坐像。側面に昭和12(1937)年1月の銘がある。
14	播磨備前国境石	●			7 27 32		●						鶴和の綱崎は、かつては砂嘴状に細長く砂地伸びる地形を呈しており、その砂嘴上に播磨国と備前国の国境石が建てられていた。表に「從是取嶋島見通シ」とあり、下部に「東播磨國」「西備前國」と並記され、右に「從是東播磨國」、左に「從是西備前國」と刻まれている。
15	鳥撫の道標	●			7 27		●						播磨と備前とを結ぶ街道沿いにあった。高さ56cm、幅28cmを測る花崗岩製で、「右 かたかみ 左 は(カ)満 道」とある。
16	旧街道の道標	●			7 27		●						旧街道に沿った田淵橋の際にあり、「東 是より東 赤穂へ二里」、「北 田淵橋 道標」、「南 旧街道 道標」、「西 是より西 日生へ二里」と刻まれている。福浦が岡山藩に属した時代から、赤穂との関わりが深かったことがうかがえる。旧街道は現在、狭い農道としてわずかに原形をとどめているにすぎない。
17	堤防水門扉	●			8		●						岡山藩池田忠雄の時代に実施された第1期干拓事業により、古土手堤防に取り付いていたと考えられる、長さ約178cm、幅約94cm、厚さ約25cmを測る花崗岩製の板状石造物である。「寛永六(1629)年四月十一日 川本村作工門」と刻まれている。寛永橋付近の川底から見つかった後に火葬場に移され、棺台として利用されていた。
18	古土手石灯籠	●			8		●						自然石を組み合わせた灯籠で、道路改修で若干埋まり、現在の高さは約2.7mである。古土手とは岡山藩池田忠雄の時代に実施された第1期干拓事業の際の潮止め堤であり、石灯籠も当時のものである。
19	恋ヶ浜の石碑	●			8		●			●			綱崎にある恋ヶ浜は、美しい自然の砂浜で、かつては海水浴や、潮干狩り、キャンプなどで賑わったという。恋ヶ浜の名前の由来として次のような話が伝承されている。昔、この海辺に漁を生業とする若い夫婦が仲睦まじく暮らしていたが、嵐の日にもかかわらず夫は漁に出ていき、夫は帰らぬ人となってしまった。その後しばらく夫を思ひ慕う妻の姿が見られたが、やがて夫を思い慕う妻は、海に入水して果てたという。砂浜に出るまでの傍らに「恋能者阿彌」の石碑が建てられており、この碑から少し離れたところに1基の供養碑がある。碑の正面中央には「梵字(キリク)阿弥陀佛(浄土宗)位」とあり、その右には「承応三(1654)年生国平安城申御方美カ」と、左に「極月(12月)九日住国芸州 北川仁左衛門」とある。
20	力士の碑	●			8		●			●			昭和24(1949)年建立。昭和2(1927)年に大阪角力協会を合併した日本の相撲会を一本化した際、相撲協会を退き郷里の鶴和に帰った増勇吉五郎(正木吉五郎)は地方相撲に貢献したという。赤穂の地方相撲(草相撲)の地元力士を偲び石碑を建立した。
21	真木開拓記念碑 鶴和耕地整理記念碑	●			8		●			●			鶴和は元来平野が少なく、生産性に乏しかった。大正元(1912)年に耕地の拡大が計画され、翌年8月31日に耕地整理が行われた。約17haであった耕地は約58haとなり生活は豊かになった。この恩恵を記念して、大正13(1924)年6月に、岡山県福河村の福浦に生れた漢学者水利有終によって撰された碑を建立したものである。右横には真木の開拓を記念して明治18(1885)年に建立された石碑がある。真木の国道沿いにあったが、国道改良工事に伴って現在地に移された。
22	簡易水道敷設完成記念碑	●			8 28		●			●			天神山の山裾にあり、荒尾太郎吉らによって大池の水の流れを利用して専修寺裏に水源となる溜池がつくられ、昭和10(1935)年に簡易水道が完成したことを記念した石碑。石ヶ崎集落の水櫃として利用された。大正13(1924)年建立。
23	機ヶ谷池の記念碑	●			8		●			●			大正5(1916)年から昭和5(1930)年の約15年の歳月をかけた、ため池造成と8町歩余の水田開発の記念碑。昭和5(1930)年の建立。
24	玉垣階段完成記念碑	●			8		●			●			福浦八幡宮の玉垣・階段建設の寄付金の募集に尽力した榎本定吉氏等が発起人となり氏子、総代、委員などが三者一体となり神域の美化のために力を合わせて完成した記念碑。大正2(1913)年建立。
25	消防5分団詰所 移転新築碑	●			8		●			●			以前は宇田中の集会所付近にあったが、昭和6(1931)年に石ヶ崎に新築移転。その時の消防組幹部、地区役員の名が刻まれている。昭和58(1983)年の詰所改築に伴って詰所前に設置された。国道改良工事により、平成14(2002)年に現在地の駐在所前に移設された。
26	藤原兵太郎翁頌徳碑	●			8		●			●			藤原兵太郎は、私財を投じるとともに身をもって土木工事に精励し、かつては湿地帯であったが、約20haの新田開拓を行った。開拓地は兵太郎の姓を取って「藤原新田」と呼ばれ、新田居住者は兵太郎の功績を讃えて昭和11(1936)年に頌徳碑を建立した。
27	紀元二千六百年記念碑	●			8		●			●			昭和15(1940)年建立。紀元2,600年を記念して塩屋国民小学校に奉建していたが、戦後の校舍改築の際に松崎中尉が折方出身ということから現在地に移された。
28	花道山本先生碑	●			8		●			●			花道の師を忍び子弟有志が建立した。明治後期の建立。
29	水利先生旌徳碑	●			8		●			●			名は新五郎、真姓を有終といひ、万延元(1860)年に福浦で生まれ、幼くして学問を志し8歳で村塾に入った。東京帝国大学の古典科進学をあきらめ郷校教育に専念、赤松・片上・三石村の児童を教える傍ら私塾を開校し40年にわたり漢学を村の子弟らに教えた。また村社八幡宮の社掌(神職)としても晩年を尽くした。大正15(1926)年建立。
30	吉栖恩師碑	●			8		●			●			昭和2(1927)年、遠近の子女のために裁縫を教えたことに敬意を表してその子弟が建立した。
31	吉栖先生碑	●			8		●			●			昭和6(1931)年建立。
32	栄俊太郎旌功碑	●			8		●			●			安政3(1856)年福浦生まれ。壮年教育に従事し、相生小学校に在職後に福浦小学校で教鞭をとる。辞職後、村会議員など歴任し、後に福河村長に公選された。常に励精で特に土木工事に力を注いだ。さらに本村漁業組合、法光寺再建にあたりその力量を発揮した。亀山本願寺で急逝。この死を悼み有志が旌徳碑を建てた。昭和2(1927)年建立。
33	額田先生之碑	●			8		●			●			額田氏は福河村の名家で、恵四郎は壮年になり小学校教員、3期12年福河村長を務め、その後も子弟を集めて夜学を開校した。その徳を追慕して碑を建てた。大正7(1918)年建立。
34	故陸軍一等卒 吉栖君神道之碑	●			8		●			●			明治20(1887)年建立。

西部地区の歴史文化遺産一覧(2)

※視点番号は252頁を参照。

No.	名称	もの	場	と	地域	の歴史	文化	赤穂を代表する歴史文化						解説
								1	2	3	4	5	6	
35	岡先生之墓碑	●			8							●	子爵の教育に尽力し学務委員、村会議員などを歴任した幸平の優れた学徳を偲んで、塾生たちが記念に墓を建て恩人に頼いた。明治27(1894)年建立。	
36	八幡宮の楠木	●			8		●					●	福浦八幡宮の参道入口に氏子が植樹した幹周り4.8m、樹齢400～500年と伝わる市内最大のクスノキが並ぶ。	
37	天神山古墳		●		34							●	かつて折方字天神山のミカン山の中央にあった後期古墳で、墳丘は流出し、石室の石組が露出していた。残存していた石室は長さ4.5m、幅87cm、高さ1.65mあり、須恵器小片が採集されている。昭和41(1966)年に工場敷地造成用の土取場となり、その後の宅地化のため消滅した。	
38	真木貝塚		●		34							●	畑を開墾中に発見されたもので、ハイガイ・アサリ・ハマグリなどの貝類、室町期の壺形土器が出土し、室町時代初期から中葉にできた貝塚と推定されている。	
39	天和ノ浦貝塚		●		34							●	畑を開墾中に発見されたもので、ハイガイ・アサリ・ハマグリなどが多量に堆積している。	
40	正八幡宮(福浦本町)		●		8 33			●				●	祭神に仲哀天皇、神功皇后、応神天皇、日子穗手見命を祀る。また境内の荒神社は須佐之男命、金毘羅社は大物主命を祀り、祠の下には「荒」「金」の鬼瓦が置かれている。	
41	愛宕神社		●		8			●				●	祭神は火産靈神、法光寺裏の山腹に立地し、火の神として崇拝されている。建立時期不明であるが、古老の話では八幡宮より前からあったとされる。一時期八幡宮に合祀され、村に火災が多発したため土砂降りの雨の日に元の場所に戻ったところ、火事が少なくなったとの云われがある。	
42	天則荒神社		●		8			●				●	祭神は須佐之男命。地元では通称「宮谷」と呼ばれている。天和年間(1680年前後)に岡山藩による干拓事業の際、土地の氏神を祀るために建立されたと伝わる。日本殿から昌久郡佐山村の宮大工5人が文政3(1820)年6月に建立と書かれた棟札が見ついている。現在の本殿は昭和29(1954)年7月に再建。	
43	龍神社(福浦新田)		●		8 33 35			●	●			●	祭神に少童神、大山祇神、道祖神を祀る。境内社として、稲荷神社と恵比寿神社があり、それぞれ宇迦之御魂神と恵比須を祀る。由来は宮崎刑部の龍退治による建立とする説(赤穂の昔話)と、神の大堤防構築工事の際に航行や工事の安全を祈願して建立とする2説がある。また戦時中には「玉よけ神社」として遠来からの参拝者で賑わった。	
44	塩釜神社(古池)		●		8 30 33			●	●	●		●	祭神に塩土老翁、建御雷神、経津主神を祀る。古池塩田を干拓する際に、塩田の神様を祀るために建立したとされる。神社の裏には恵比須神社と首塚が祀られている。	
45	八幡神社(折方)		●		8 33			●				●	由来は不明、祭神は仲哀天皇・応神天皇・神功皇后。かつては折方村の田中・南・奥・砂子・石ヶ崎の各地区ごとに八幡神社・荒神社・権現神社・天王神社・天神社が祀られていたが、明治40(1907)年頃に八幡神社に合祀された。参道・境内には、各神社から移設された多数の石造物がある。拝殿には、明治45(1912)年に北條文信が描いた義士画像因絵馬が奉納されている。『播州赤穂郡志』には「八幡宮 山林境内五十間(約90m)六十間(約108m)、下畑一反(約900㎡)寛永二己(1625)年除地」とある。	
46	荒神社(鳥撫)		●		8 33			●				●	祭神は素戔鳴尊、太宰神社・銭島八幡神社を合祀。境内には「大正八(1919)年十月」銘の備前焼製の狛犬がある。10月の例大祭に獅子舞は、平成8(1996)年に市の無形民俗文化財に指定されている。また境内下に「カワ」と呼ばれる湧水がある。	
47	八幡神社(銭島)		●		8			●				●	慶長5(1600)年、播磨国の領主となった池田輝政は、翌年赤穂郡代に垂水半左衛門を任命し、領国西南端の守護神として弁財天・住吉・八幡を銭島(銭戸島)に祀った。その後、東浜の塩田開拓のため慶長10(1605)年に八幡神社のご神体は尾崎の地(赤穂八幡宮)に移され、社は鳥撫荒神社の西に移されたという。	
48	荒神社(真木)		●		8 33			●				●	祭神は素戔鳴尊で、八幡神社を合祀する。境内には「宝暦六丙子(1756)年九月二十四日」銘の石灯籠や、備前焼製の狛犬などがある。真木の峠南方には、合祀された八幡神社の御神体が流れ着いたとされる大きな自然石が今も残されている。	
49	天王神社跡		●		8			●				●	境内、本殿、拝殿の石垣が残されている。一村一社制のため明治40(1907)年に八幡神社に合祀され、鳥居などが移築されたという。	
50	権現神社跡(織湯権現)		●		8 32			●				●	参道の石段、拝殿あるいは絵馬堂があったと思われる境内の石垣、本殿の石垣・石段が残されている。明治40(1907)年に八幡神社に合祀され、鳥居などが移築されたという。	
51	法光寺		●		8 29			●				●	浄土真宗本願寺派の寺院。永和2(1376)年に真言宗法光院として創建され、文明5(1473)年に浄土真宗に改宗。当時は八幡宮の西に位置する小さな庵の寺院で、元和年間(1620年頃)に全焼後、元禄4(1691)年に再建。明治32(1899)年、栄俊太郎や額田恵四郎らの尽力により、現本堂が建立された。山号は聳香山。	
52	恵照院		●		8 35			●				●	臨済宗妙心寺派の寺院で、宝暦元(1751)年、加里屋の随鸞寺五世照山の隠棲として建立され、釈迦牟尼仏、観音菩薩、稲荷を祀る。観音菩薩は平安末期の作といわれ、九州の人の作と伝わる。菩薩が老婆の夢に現れ、海から拾い上げて祀ったという伝承がある。境内に安置される3体の地蔵は、昔から「乳の地蔵」と呼ばれ、文化3(1806)年、文化8(1811)年の銘があるもので、育児の無事成長を願う女性の参詣が多い。平成17(2005)年に石仏の堂宇新築。赤穂の昔話には、「きんこさん」という旅の坊主を仮住まいさせた縁起として登場する。(赤穂の昔話)	
53	浄専寺		●		8			●				●	阿彌陀如来を本尊とする浄土真宗本願寺派の寺院。永正3(1506)年、本願寺八代の蓮如上人に帰依し、尊号を申し受け開基したと伝えられる。山号は大光山。境内には本堂をはじめ、鐘樓、庫裡、書院、山門(四脚門)、薬医門(通用門)がある。	
54	専修寺		●		8			●				●	浄土真宗本願寺派の寺院で、本尊は阿彌陀如来。織田信長が加賀越前を攻めた折に高田専修寺(本山は三重県津市一身町、本寺は栃木県真岡市高田)より分かれて逃れ、本地に移ったといわれる。寺号の由来は、浄土系宗派の特徴である専修念仏による。山号は大谷山。境内には山門(薬医門)・本堂・鐘樓・庫裡がある。境内地の北西には、簡易水道敷設完成記念碑が建てられている。	
55	業師堂(福浦本町)		●		8			●				●	かつては堂前に湧水があり、産後に乳の出ない婦人が飲めば乳が良く出るとされ、近在の人々が水を求めに訪れた。昭和62(1987)年、正八幡宮参道前の公園に移築。堂内には業師像のほか地蔵が2体安置されており、旧街道田沼橋北50mのところ旅人の安全を祈願して建立されたが、個人宅に祀られた後、台風で堂が壊れたため業師堂内に移された。1体は丸彫り坐像、もう1体は舟形後背を持つ半肉彫りの地蔵である。	
56	水神宮		●		8			●				●	西ノ井の端、天神山の山裾にあり、石ヶ崎集落の水櫃として古くから利用されていた。集落の水道としては赤穂では早く、昭和10(1935)年には簡易水道として完成した。天神山地区の造成によって埋没するのを避けるため、造成中の10年間は個人宅の大岩の脇に移転され、完成後に現在地に祀られた。傍らには旧井戸の側石を使った石碑が建てられている。	
57	お大師堂		●		8			●				●	赤穂八十三番札所であり、大師座像を祀る。堂の右手裏に湧水があり「お大師水」と呼ばれて飲料水にされていた。新田地区の井戸水は塩分が多いため、二軒屋、八軒屋からも担い桶で水を汲みにきていた。	
58	観音堂(日々庵)		●		8			●				●	元は、銭島(銭戸島)にあったが、昭和32(1957)年に現在地に移された。千手観音像を祀る。堂前に建つ「日々庵」の石碑には「天保五甲午(1834)年正月八日」「施主 木生谷榮三郎 根々子小次郎」の銘がある。	
59	西浜塩田跡		●		8 30			●				●	古代から製塩がおこなわれていた塩屋では、近世になり池田時代～浅野時代～森時代と塩田開拓を行った。尾崎地区・御崎地区の東浜塩田に対して、塩屋地区は西浜塩田と呼ばれ、宝永3(1706)年で95町反8畝ほどあったとされ、西浜での平均生産高は約10万石と推定されている。西浜は主として「真塩」と称する上方向けの上質塩を生産し、大坂市場を得意先としていた。	
60	藤原新田		●		8 28 30			●				●	島の南は広大な葦原であった。住民が藤原兵衛を招いて相談し、大正3(1914)年に干拓が起工され、大正8(1919)年に約20haの造成が完成した。	
61	古池塩田跡		●		8 30			●				●	享和元(1801)年、備前国和気郡福浦村と寒河村の百姓が、福浦村字古池周辺の干潟の干拓を岡山藩に願い出た。その後文政6(1823)年には2町8反2畝25歩半(約2.8ha)の入浜塩田が完成したが、生産性は低く、製塩が何度か中止されることもあった。昭和29(1954)年になると流下式塩田による製塩が行われ、昭和46(1971)年の枝条架の全築により製塩が中止された。現在も枝条架撤去時の様子をそのまま残しており、貴重な遺構となっている。	
62	沖の大堤防		●		8			●				●	岡山藩の時代に実施された第2期干拓事業の際の潮止め堤であり、240間(約432m)にわたる長大な堤防である。構築には三段積み工法が用いられた。施工の数年前に入龍山、八軒屋、黒鼻の岩石を投入して泥底の沈下を待ち、さらに捨石を敷いて、その上に石材を積んだ。干拓事業は新田開発で実績を残し、開拓学校の経営や後楽園の造営などにも力を注いだ岡山藩郡代津田重次郎永忠が担当した。現在はコンクリート製になっている。	
63	本町寺東火葬場跡		●					●				●	以前は市道新田線と備前河野駅道路の三叉路付近にあったが、昭和30(1955)年に国鉄赤穂線が赤穂・日生間を開通するため、山林に移転した。その後昭和38(1963)年の赤穂市との合併によって市営斎場を利用することとなり、廃場となった。福浦にはほかに本町寺西、古土手、新田五軒家、新田八軒家、古池にも火葬場があったが、現在すべて廃場となっている。	

西部地区の歴史文化遺産一覧(3)

※視点番号は252頁を参照。

No.	名称	もの	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化						解説
					1	2	3	4	5	6	
64	福浦小学校跡	●		8	●						明治6(1873)年に創立された。明治22(1889)年に福浦・寒河小学校が統合されて尋常福浦小学校と改称する。明治32(1899)年に福浦校舎が倒壊した後、明治35(1902)年に寒河東奥に移転した。
65	兵庫県・岡山県の旧境界	●		7	●						昭和38(1963)年に岡山県日生町福浦地区が赤穂市に編入合併したため、兵庫県と岡山県の境界は変更された。
66	旧街道	●		7 8 27	●	●					日生方面につながる街道。
67	福浦峠	●		7 27	●						兵庫県と岡山県の境界、赤穂市と備前市の境目にある峠。
68	鳥打峠	●		7 8 27 35	●						鶴和真木と福浦との間の峠。『撰要録』では「鳥居峠」と記載されている。赤穂市が福浦を越境合併するまでは播磨国(兵庫県)と備前国(岡山県)の境界にあたり、赤穂の昔話にはかつて番所があったことが記されている。(赤穂の昔話)
69	採石地	●		8	●						現在も採石場があるが、古くから採石が行われており、近代には阪神間へ庭石の需要もあった。
70	入電池	●		8 35	●						地名。民話によると宮崎刑部によって矢で両目を打たれた龍がもがき苦しんでいたうちまわっているところに、雷が落ちて池ができたといわれる(赤穂の昔話)。現在は福浦漁港となっている。
71	機ヶ谷池	●		8	●						7丁歩余りの水田開発のために築かれたもので、大正5(1916)年に着工し、昭和5(1930)年完成した。
72	古池(折方)	●		8	●						折方川沿いに築かれた池。
73	新池(折方)	●		8	●						折方川沿いに築かれた池。
74	鳥打峠池	●		8	●						鳥打峠西側に築かれ、満水時貯水面積16,000㎡を測る、福浦地区で最大級の池。
75	西の谷池	●		8	●						福浦本町の法光寺西の中の谷川沿いに築かれた池。
76	新池(福浦本町)	●		8	●						口の池よりさらに山側に築かれた、満水時貯水面積14,600㎡を測る、福浦地区で最大級の池。
77	口の池	●		8	●						福浦本町地区の共同墓地西側に築かれた池。
78	中の谷池	●		8	●						福浦本町の次郎太夫川沿いに築かれた池。
79	中河原池	●		8	●						赤穂カンツリークラブ内に築かれた池。
80	荷子台池	●		8	●						赤穂カンツリークラブ内に築かれた池。
81	荷子谷池	●		8	●						赤穂カンツリークラブ内に築かれた池。
82	奥の池	●		8	●						成瀬川沿いに築かれた、満水時貯水面積15,500㎡を測る、福浦地区で最大級の池。
83	南池	●		8	●						石ヶ崎天神山の山裾に築かれた池。
84	藤原新田池	●		8	●						藤原新田は大正8(1919)年に藤原氏による20余町歩の農地が開かれた。
85	戸島用水	●		8 28	●	●					山崎山麓の戸島橋から導水された旧赤穂上水道は、鶴和まで敷設されていた。
86	取揚島	●		7 36	●	●					千種川河口先の播磨灘にある3,562㎡の小島。江戸初期に播磨国と備前国との間でこの島の領有権争いがあり、幕府が取り揚げたことによる。のち島の東を播磨、西を備前領と定められた。現在も島上の石標から綱崎海岸に建つ国境石を見通した海上線が岡山・兵庫県境である。往昔の景勝地。
87	銭戸島(船番所跡)	●		8	●	●		●			池田輝政は鳥撫村銭戸島に弁財天・住吉・八幡の三神を祀って海上安全を祈った。大津川河口地域の干拓を計画していたためと伝わる。慶長10(1605)年に八幡神は尾崎に遷された。また赤穂藩主浅野長直が新田開発の際、この地の土を採取して97町歩余りの水田を開いた。またこの地に船番所を設け内海航行の船を監視したという。
88	福浦塩田公園	●		8 30					●		国道2号沿いにあり、流下式塩田の枝葉架のモニュメントが整備されている。広場は入浜塩田がモチーフであり、東屋は釜屋風となっている。
89	JR備前福河駅	●		7 27					●		JR赤穂線の駅名。合併により現在は赤穂市であるが、かつて備前であったことが駅名より慮れる。
90	JR天和駅	●		27					●		JR赤穂線の駅名。昭和38(1963)年に開設された。
91	鳥撫荒神社獅子舞		◎	8 33						●	獅子舞は伊勢系の神楽獅子であり、豊作を祝い、神に感謝する舞として明治後半頃に千種川筋の高野・木津・高雄等の獅子舞を習得して始められたもので、不作の年には舞うことはなかった。16種類の舞があり、梯子獅子など市内随一の芸獅子が特徴で、市指定無形民俗文化財となっている。
92	福浦	●		32 36	●	●					地名。自然地形と大字名(ふくら)から古代は大きな入海(湾)であったことがわかる。
93	折方	●		32			●				地名。詳細は不明であるが、江戸時代の記録には織湯・織方があり、機を織っていたことに由来するという。
94	鳥撫	●		32			●				地名。鳥撫村。
95	牧(真木)	●		32			●				地名。真木村。
96	鶴和	●		36			●				地名。明治9(1876)年に真木村36戸と鳥撫村68戸が合併した。頭文字の真と鳥を合体した「鶴」を選び、仲良く発展しようと「和」をつけた新地名である。
97	天神山	●		36			●				地名。古墳のところに天神社(明治後期に移した)があったことによる。現在は全山が宅地となっている。
98	恋ヶ浜(恋ノ浜)	●		32 35			●	●			地名。広島浅野藩領より流されてここに住み着いた漁師があるとき遭難したのを悲しんで妻が入水したことによるという(赤穂の昔話)。また恋の松原備前境ともいわれた。
99	綱崎	●		7 32 35			●	●			地名。大津川河口右岸の地名。現在は埋め立て地となっているが、綱崎から南西の古池へ至る海岸線は、瀬戸内海の多くの海岸線と同様に、陸地が海の中に沈みこんだ状態を示す沈降性海岸である。赤穂の昔話「恋ヶ浜」の舞台となっている。(赤穂の昔話)
100	石ヶ崎	●		36			●	●			地名。江戸時代の中ごろまでは大石の山が海中に突出していた景勝の地。
101	大泊	●		8 27 36			●	●			地名。泊まりとは、海辺で大風を防ぐ入江、船を係留するのに安全な場所をいう。大泊は40数軒の大集落であったようであるが、今は二軒屋、五軒屋、入電に移住している。
102	船隠	●		8 27 36			●	●			地名。干拓前、漁業者が風を避けて船を係留していた。風から船を隠したところから付いた地名。
103	古池	●		8			●	●			地名。300〜400年前より人が住み着いたとされる。今の集落地は窪地(古池)で、沖は遠浅であった。
104	真尾鼻	●		8			●	●			地名。綱崎と真尾鼻を結んだラインが、今も赤穂市と岡山県日生町に関する漁業権の境界となっている。
105	九艘泊	●		27			●	●			地名。遣隋使時代からの風よけ、潮待ちのための船が停泊するための入江であり、当時一度に九艘の船が停泊したと伝わる。